

—よろづの	一四	あらたまの	二三	—するどき	二八	いたづらに	二四	—によらい	八
—おなじ	一四	あらたのし	二五	—うその	二九	いつかうに	二五	—こゝろの	一六
—よろづの	一六	あらためて	二六	—のみても	三〇	いつかうに	二六	—つしんを	九
—よろづの	一七	あらやてふ	二七	—あぢはひても	三一	いつかはた	二七	—つよりか	一〇
—よろづに	一八	ありといふ	二八	いかなりし	三二	いつかはた	二八	—つれとも	一一
—よろづの	一九	ありがたや	二九	いかなりし	三三	いづかたへ	二九	—ときよき	一二
—よろづに	二〇	ありがたし	三〇	いかにして	三四	いづこにも	三〇	—ときよき	一三
—よろづの	二一	ありあけの	三一	いくちとせ	三五	いづこにも	三一	—ときよき	一四
—よろづの	二二	あはれて、	三二	いちによなる	三六	いづこにか	三二	—とちさき	一五
—よるづは	二三	い	三三	いんねんと	三七	いづこにか	三三	—とはしき	一六
—なべての	二四	いかばかり	三四	いしにさへ	三八	いづこにか	三四	—いとびなる	一七
—よるづの	二五	—つみの	三五	いにしへに	三九	いつたびの	三五	—わがな	一八
—よるづは	二六	—おろが	三六	いるみちを	四〇	いつさいの	三六	—かしこき	一九
—うちと	二七	—こまか	三七	いさぎよく	四一	いつしんに	三七	—まきの	二〇
—よるづの	二八	—わかれ	三八	いさぎよき	四二	—なむ	三八	—しづの	二一
—あめつちは	二九	—あくま	三九	いさましく	四三	—なむ	三九	—くやの	二二
—あやにしき	三〇	—ひとの	四〇	いさましく	四四	—くわうみやう	四〇	—まははた	二三
—あらがれも	三一	—こまかに	四一	いさましく	四五	—によらい	四一	—まははた	二四
—あらたまの	三二	—はげしく	四二	いたつきに	四六	—によらい	四二	—まははた	二五

—じひのみがほ	—しんりのひかり	—しのぶの	—すべては	—そのみに	—たまの	—だいごの	—つひの	—つひの	—つひのみむれ	—とこよに	—とはの	—れはんに	—ほふかいやう	—ひかり	—ひかりを	—ひかりに	—ひもとに	—みむれしらせん	—みなをたへて	—みなを
一三	二九	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九九	九八
—みはからひ	—みむれしなくば	—みむれより	—みむれにかないし	—みむれにそむく	—みむれ	—みむれに	—みむれに	—みむれに	—みむれの	—むぬの	—めぐみは	—めぐみのちぶさ	—めぐみの	—おほみおやは	—あまつ	—いかなる	—うちうの	—うちうせんたい	—くもの	—こらな
二四	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六
—こらなをまらきて	—こらなをさめて	—こらなをさめて	—じひの	—すべて	—つひの	—おほみおやを	—おもふ	—おやと	—しらざればこそ	—しらぬむかし	—みおやと	—おほみむれに	—おほみむれの	—おほみむれの	—おほみむれを	—おほみむれに	—おほみむれに	—おほろよの	—ことゝ	—さやかに
三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三
おくふかき	おくふかき	おほぞらに	おほぞらに	おほい()に	おそろしき	おのがむれ	おのがひを	おもひにも	おもひきや	おもほへば	おこそかに	おしやかさま	おしやかさん	おみたふにどうくわ	おみたふは点ん	おみたふのこゝろの	おみたふのひかりに	おみたふのひかりの	おみとふの	おのがみも
九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	八五	八四	八三	八二	八一	八〇	七九	七八	七七	七六
おのれてふ	おのれのみ	おのれのみ	おのれをも	おのれてふ	—まよひの	—わがはからひ	—おのれと	おのれいま	おのれとて	おのれほど	おめぐみの	おやとこの	おやもこも	おやなくて	おやはこな	おもひひの	おもひだす	おもひつゝ	おもひでて	おしひでゝ
九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	八五	八四	八三	八二	八一	八〇	七九	七八	七七	七六

しゆしやうげに

しづげくも

しよくわんなる

したのうち

す

すまだいの

すむみづに

すあつひに

すあじようきの

すぎはひに

すみぞめの

すまのうちらに

すみぞめの

すこやかな

すてがたき

すてがたき

すつるとも

すみのゑに

すゝみゆく

三三

二三

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

一六

一五

一四

一三

せ

せいぎとは

せいぎとは

せいぎなる

せいぎには

せいりよくな

ぜつたいの

—たいれい

—じいうな

—たいがの

—しんりの

—りしやう

—せんあくも

—せいぜんの

そ

そなふべき

そしやくして

そこひなき

そとにてんち

三三

二三

二三

二三

二三

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

〇九

〇八

〇七

そらにてり

そこひなき

そこひなき

そこひなき

そらはれて

そめやらで

た

たいめいに

たいやうの

だいうちうな

たきつせの

たのしさを

たのしさを

たねなくば

たのおのが

たのおのが

たゝかへよ

たかまはら

たまものゝ

たまものゝ

三九

三六

三六

三六

三六

三三

三三

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二四

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

たまのなも

たましひの

たましひを

たましひを

たゝあがた

たてにさんぜ

たちさはぐ

たちかへり

たゆみなく

たちぬひも

たえなくば

たくらぶる

たぐひなき

たがひなき

たがひなき

たがひなき

たがひなき

たがひなき

たがひなき

たがひなき

たがひなき

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

ち

ちりにそむ

ちりんくの

ちはやふる

ち

つきみむと

二七

ひにあらた	一七	ふれまじと	一七	ほんぞんの	一七	まかはんにや	一七	うけたる	一七
びやうどうの	一六	ふるとおもふ	一六	ほんぞんを	一六	まかはんにや	一六	うけたり	一六
びやうどうの	一六	ふるさとを	一六	ほんぐわんとは	一六	まんとの	一六	うけし	一六
びやうどうの	一六	ふるさとの	一六	ほんのうの	一六	まごゝろに	一六	うけし	一六
ふ	一六	ふるさと	一六	ま	一六	まごゝろに	一六	うけたる	一六
ふかきふちに	一四	ぶつしやうは	一四	まとにいる	一四	まごゝろに	一四	うけたる	一四
ふかみぐさ	一三	ぶつけうに	一三	ちまわびし	一三	まごゝろに	一三	うけたる	一三
ふきすさむ	一三	ぶつしやうの	一三	まちとほく	一三	またもなき	一三	うけし	一三
ふきすさむ	一三	ふんぬとは	一三	まちいづる	一三	またもなき	一三	うけし	一三
ふくざつの	一三	ふりすてゝ	一三	まよへるも	一三	またもなき	一三	うけし	一三
ふききたる	一七	ふりつもる	一七	まよひごの	一七	またもまた	一七	うけし	一七
ふきすさむ	一三	へんつくとく	一三	まよひより	一三	またもまた	一三	うけし	一三
ふたゝびは	一四	ほふえつと	一四	まよひぬる	一四	またもまた	一四	うけし	一四
ふたゝびは	一四	ほふえつと	一四	まよひぬる	一四	またもまた	一四	うけし	一四
ふたゝびは	一四	ほふえつと	一四	まよひぬる	一四	またもまた	一四	うけし	一四
ふしぎかな	一七	ほかにみえぬ	一七	まよひぬる	一七	またもまた	一七	うけし	一七
ふみてゆく	一五	ほふえつと	一五	まよひぬる	一五	またもまた	一五	うけし	一五
ふみのほな	一四	ほふえつと	一四	まよひぬる	一四	またもまた	一四	うけし	一四
ふみもみむ	一四	ほとげとは	一四	まよひぬる	一四	またもまた	一四	うけし	一四
ふしくも	一七	ほんがくの	一七	まよひぬる	一七	またもまた	一七	うけし	一七

題あるもの
目次

十二光	一
七覺支	五
念佛三昧	六
(撮要)	九
本願力	兜
無量光	六四
如來藏	六七
靈化	八四
無邊光	八六
大圓鏡智	八九

平等性智	九四
妙觀察智	九九
無碍光	一〇一
神聖	一〇三
正義	一一二
恩寵	一一三
無對光	一二五
十萬億土	一二七
焰王光	一三七
清淨光	一五一
五根誤用	一五三
天眼	一五七

法	眼	一五七
慧	眼	一五九
佛	眼	一六〇
歡喜	光	一六二
智慧	光	一六八
金剛	經	一六九
心		一六九
古今三世無碍		一七〇
不斷	光	一七一
忍		一七五
難思	光	一八五
欲	生	一八五

信仰の種	一八七
佛種縁より生ず	一八八
聖經の友	一八九
觀無量壽經十三觀	一九三
無稱光	一九九
七覺支	一九九
三昧無爲即涅槃	二〇三
超日月光	二〇六
衣	二〇六
食	二一一
住	二一九
(其他)	二二五

釋 尊……………三三五

玉津島明神……………三二九

(其 他)……………三三一

歳のはじめに……………三三三

(其 他)……………三三五

忘 于 世……………三三六

世間相常住……………三三六

諸法實相……………三三七

梅 花……………三三七

佛名唱ふ聲を聞いて……………三三七

魔郷不可停	二二七
仰於佛願寄于戀	二二七
憶於佛寄于戀	二二八
聞佛願歡喜	二二八
欣求淨土	二二八
法華最第一	二二八
あしたに早く筆とりて(其他)	二二九
文 明(其他)	二四〇
心識如幻	二四一
地 球	二四一
忍	二四二
月前述懷(其他)	二四二

十一歳に垂んとする時.....	二四三
十四五歳の頃.....	二四五
十六七歳.....	二四六
滿十九歳.....	二四六
出家の日.....	二四七
一切經を閲みしける頃.....	二四七
出家學道.....	二四七
雪のふる日かい澤峠にて.....	二四八
村里に布教道場をたてむと.....	二四九
法の道を弘めまほしく思ひて.....	二四九
冬　　夜.....	二五〇

(二十餘歳本所菊川町鈴木氏へ).....	二五〇
師匠のはかにまうでゝ.....	二五八
亡師七回忌にあたりて.....	二五八
教師補をうけよとすゝめられし時.....	二五八
香衣をうけよとすゝめる人に.....	二五九
関大藏經.....	二五九
聖經をよみて聖跡のしたはしければ.....	二五九
(其 他).....	二五九
西天の聖蹟參拜發錫のとき.....	二六七
印度聖迹に拜したる時.....	二六七
鹿野苑にて.....	二六八
亡き母に手向く.....	二六八

(補遺)

和讃

おほせのつとめ

二八一

いのちの葉

二八一

光明攝化

二八二

如來讃

二八四

固地願

二八五

清淨光

二八六

歡喜光

二八七

智慧光

二八八

不斷光

二八九

清淨光

二九〇

智慧光	二五五
歡喜光	三〇〇
不斷光	三〇五
安養界	三二〇
無量壽經下卷濁れる世	三三二
同、貧賤の勢	三三四
同、憂世の浪	三三五
同、闇の源	三三九
同、痴愛の悶	三三三
同、廢惡進善(五惡段)	三三二
光明大師の讚	三六六
大みおや	三五五

十	界	三五二
	のりのいと	三五四
	育兒の歌	三五六
	光明(清淨歡喜不斷)	三五七
	入山學道	三五八
	聖者の表情	三五九
	諸根悅豫讚	三六一
	姿色清淨讚	三六三
	光顔巍巍讚	三六四
	むつみの正因	三六五
	正婚の頌	三六六
	聖き皇統	三六七

おみなほ模	三六八
禮拜の範	三六九
不死の忠魂	三七〇
念佛將軍	三七二
感謝の歌	三七三
大經讚佛偈	三七五
法藏菩薩發願の偈	三七六
四誓の偈	三七八
靈鷲の月	三八〇
靈山淨土	三八一
釋尊の本懷	三八二
聖意の現はれ	三八三

佛々相念の讚	三六四
佛智の靈國	三六七
聖種	三六九
よろこびのひかり	三六九
三身の聖歌	三九〇
法身の讚	三九〇
報身の讚	三九二
應身の讚	三九五
一心十界の頌	三九九
假のやど	四〇三
自業自得	四〇五
釋尊出世	四〇六

大みおやの慈悲	四〇七
みおやのみもと	四〇八
如來の光	四一一
光の生活	四一三
聖衆の稱へ	四一四
光を獲る因	四一五
光を獲たる果	四一五
八相應化の頌	四一六
如來光明讚の頌(十二光讚)	四二〇
諸教の精要……諸教の大觀	四二二
諸教の宗趣	四三六
聖きみくに	四三九

念佛七覺支……………四四一

(辨榮聖者略傳)……………四四五

(和歌索引)……………四四九

(目次)……………四六一

附言

本文中の括弧は御草稿原文の缺句缺字及び墨にじみ等にて讀む能はざりしもの
 口繪第一葉大正七年（西曆一九一八年）御歳滿五十九歳、群馬縣高崎市桜井伊兵衛氏の別荘にて撮
 影。第二葉の二尊の聖像は大正四年十月廿二日千葉縣東葛飾郡手賀村泉古川利子（御生母實家）方
 全焼の際焼灰片付けの時灰の中より發見せられし御筆の二軸

咀嚼していよ／＼甘き味はよく思てそ眞理知るなれ

雲はれてさやけき月のひかりにて（ ）

うたかひの雲はれわたりさやかなる月を（の）ひかりを見る（そ）うれしき

本よりも天にも（は）雲のなきものを己かまよひそ覆はるゝなれ

よしもなき己かはからひぬきすてゝ本有の天の月をなかめよ（天ははれわたるなり）

大みおやのみめくみの光かよひ來て心の花もさきそめにけり

あかねさす日のみひかりにうつろひて金剛石は（ ）かゝやけるかな

いさよひの月の光は西に入る日のひかりにそ照りかゝやく

有明の月とはいへとはに照る日のみひかりのあれはなりけり

身を（立）る智慧（ ）

身をおや（の）行を（立）つ智慧はかり世をみちひけるしるしなり

大みむねを己かこゝろとするときは自ら律るのりところなれ（ちからなりけり）

（みめくみに）みほとけに此の身のあふらさゝくなり聖旨の智火を點して玉へよ

大みおやの聖旨の我に（聖旨に我の）あるときは大みさかひ（え）を身にそあかさん

雲上なる高きのそみにいさなはれいやしきこゝろおこらさりけり

道詠集不許複製定價貳圓半
大正十五年十一月廿日印刷
大正十五年十一月卅日發行
編輯兼發行人東京市小石川
區水道端二の四四田中木又
印刷人印刷所東京市小石川
區茗荷谷町九八小林七太郎
發行所東京小石川區水道端
二の四四ミオヤのひかり社

辨栄聖者御入滅七十周年 記念出版

仏陀禪那弁栄聖者御著

光明
大系 『道 詠 集』

平成二年七月 四日 復刊

編 者 田 中 木 又

発 行 者 光 明 会 本 部

発 行 所 光 明 会 本 部

〒 659 兵庫県芦屋市六麓荘町二〇―二〇

電 話 〇七七一―22―四九〇―一番

振 替 神 戸 二―六 四 番

印 刷 所 東 進 印 刷 工 芸 株 式 会 社